

# 「つながり」



千葉市消防局長 中村 由明

千葉市は東京湾の湾奥部に面し、千葉県のほぼ中央、東京都心まで約40kmの地点に位置し、県内幹線道路や鉄道などの起点として、さらに情報通信網の起終点として、県内の政治・経済における要衝となっています。他方、郊外では温暖な気候と肥沃な農地を生かした都市農業が盛んに営まれており、農業・農村の有する多面的機能により、市民に「やすらぎ」や「うるおい」を与えるなど、都市機能と里山ののどかな風景がつながる多様性にあふれた都市です。

また、当市は、1921（大正10）年1月1日に市制を施行してから、今年で100周年を迎えました。市制施行時には約3万4千人だった人口は、現在は約98万人にまで増加しています。この100年のあゆみは、戦争からの復興や高度経済成長、1992（平成4）年の政令指定都市移行など、市民、企業、団体の皆様がまちの発展のために知恵を絞り、努力を積み重ねられて後世へとつないでこられた軌跡です。我々は、先人たちの業績に感謝するとともに、当市が日本の中で果たしてきた役割やその価値を見つめ直し、いかに未来へつなぎ、発展させていくのかを考え、行動する機会となるような取組みを進めていかなければならないと考えております。

令和3年度を迎えましたが、前年度を振り返りますと、新型コロナウイルス感染症への対応に追われた1年でした。特に緊急事態宣言が再発令された1月は、当市の救急医療体制はひっ迫し、各関係機関は平時の体制を維持することが非常に困難な状況にありました。救急業務も同様で、1搬送当たりにおける医療機関への平均照会回数は2.40回（1月31日現在。前年は1.89回）と、一刻を争わなければならない傷病者の「救命のリレー」を次へつなげることが困難な状況になっていました。

そこで、当局では各関係機関の連携をより一層強化することで、傷病者の搬送と受入れを円滑に行うことを目的に、1月18日から豊富な現場経験を持つ救急救命士5人を保健所へ調整員（リエゾン）として派遣しました。調整員は交代しながら24時間体制で、「救急隊、消防局及び保健所との連絡調整、報告等」、「新型コロナ陽性者、濃厚接触者又は擬似症患者を救急隊が取り扱う場合の医療機関照会」、「傷病者の搬送困難症例に対する救急隊へのサポート」を主な任務として対応し、いわば組織間の緩衝材や潤滑油となり、保健所と救急隊との連携が迅速かつ円滑化し、傷病者の負担軽減につながりました。

このような体制づくりを迅速に行うことができた背景には、従来から当市では市長部局と消防局との人事交流や業務内において積極的に連携してきたことが挙げられ、コロナ禍を経験したことで、この「つながり」が一層強固になったものと実感しています。

我々は今後も、市制100周年の歴史の中で先人たちが築き上げてきた多くの関係機関や市民などとの「つながり」をより一層強固なものとする中で、大規模化・複雑化する災害や、社会情勢とともに多様化する市民ニーズに的確に対応できる組織づくりを行い、「安全・安心のまち 千葉市」の実現に向けて邁進していく所存です。